

「日々是好日」

寺子屋プロジェクト和尚の話 第17回：「日日は好日」

今回より禅語から日常の生活用語になったり、戒めや教訓などに使われたりして私たち日本人の暮らしに使われるようになった言葉について、お話しさせていただくことにしました。

第一回は「日日は好日ニチニコロウニチ(コウジツ)」、もとは中国、宋の時代の公案集「碧巖録」(注1)の第六則に発する言葉です。

禅宗の道場では、修行僧達は7月15日夏の修行が終わる(解制カケイ)のときに何人かの役位の修行僧の前で起単留錫(キタンリュウシヤク)という懺悔をいたします。(注2)役位の修行僧が修行僧に対して本人に成り代わって「私(=当の修行僧のこと)は、〇〇〇〇をしました。」と修行中の行動を並べます。いわば修行中の勤務評定ともいうべきもので、厳しい指摘がビシビシ飛んできます。

さてその起単留錫が終わって雲門和尚がお坊さん達に向かって「さあ7月15日以前は懺悔し終わったことは問題にせん。15日以降、今日からどんな気持ちで日々を暮らす積もりか、言うてみい。」と言って皆を睨み回したそうですが、誰ひとり何とも言えません。そこで雲門和尚が言った言葉が「日日は好日ニチニコロウニチ(コウジツ)」でした。

松原泰道師はこの言葉について、白隠ですら「容易ならぬ」と嘆じたほど大切な言葉として、常識的に言う「毎日が大安吉日」ではないと指摘します。師は「自分を中心とする考え方を去って、環境の中に美なるもの、真なるものを開発するのです。」と述べています。

師は唐代の詩から「花発多風雨 人生別離足」(注3)の句：「花が咲くと、とかく風雨が多いし、人生もウンザリするほど別離の悲しが多い」との嘆きを引用したうえでここからの「転換」を言います。自分という主体を離れ「花が散る」「別れる」ことの空しさ、無常さを受け止めそのなかに花の美しさ、人生の尊さを見る、実感する「転換」、それが禅のころでもあると。

私事ですが昨年の夏は、実母の病気と別離、また前住職との急な別れが重なり、その後

に葬送の準備や段取りのための関係先との連絡・調整やらで悲しむ暇もないまま、本当に目が回るほど次から次へとすべきことを片付けていくことになりました。いわば一日一日精一杯勤めることで、行動することで一杯になり余計なことを考える暇がなくなって、やがて心が軽くなっていきました。

山田無文老師は、無文全集の『碧巖録』の第六則の提唱で「何もかも収まる。そういう心境が開けなければ、日日是れ好日とは頂けん。心は鏡のようなものだ、よく譬えられるが、鏡というものは何でもよく収める。人生もそうじゃ。どんな大きな問題が起っても、天地が引つ繰り返るような大問題が起ったって、それはかがみのなかに映った影じゃ。鏡の中から抜け出すわけには行くまい。心の外にまで飛び出しはせん。そういう大きな心分かるならば、日日是れ好日と頂けねばいかん。お互いも心の眼を開き、心の窓を開けば、日日是れ好日の日暮らしできる」とおっしゃいます。

玄侑宗久師は、普段の「私」が「雲」であるのに対し瞑想するときの「私」、「サテイ(気づき)」の主体を深くて広くて変わらない「青空」と表現しています。(注3)大燈国師が「父母未生以前、本来の面目」とは「虚空のようなもの」だと指導されたように、玄侑師は「私」という意識の念を「雲」とするならば「虚空」という大空を自分にしてしまえば「どんな雲が浮かんでいても青空は気にしていない、と言った方がいい。」といます。

山田無文老師がおっしゃる大きな鏡のような心と玄侑宗久師がいう雲の自分を浮かばせる青空のような自分、更に大燈国師のおっしゃる「本来の面目＝虚空のようなもの」とは同じもののように感じます。

前(2021年「本来の面目」)にご紹介した正岡子規の絶筆のうちの一句：

「糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな」

死期が近くなり、痰がきれずに苦しんでいる自分の姿を、何の感情も欲もなく、俯瞰して見えています。苦しみのままの現実の自分を仏として見ている自分も仏となり、見るのです。

「雲」の「私」を「深くて広い変わらない青空」の「私」が見ているのです。

死の苦しみの中ですら、「日日是れ好日」と日暮しする仏と生きているのです。

注1：「碧巖録」中国、宋(そう)代の仏書。10巻。中国禅宗の雲門宗の雪竇が古即公案百則を集めた『雪竇頌古(じゅこ)』に、臨済宗の圓悟克勤(エンゴクハク 1063—1135)が自在に評釈(批評・解釈)を加えた書。

注2：起単留錫(キタンリウシヤク) 起単は僧堂から転出すること。留錫は僧堂に残留すること。

一夏が終わると雲水は役位の前に呼び出され、起単か留錫かを問われる。その際にその間の“勤務評定”をされたりする。臨濟宗公式サイト用語解説から。

注 3：于武陵 「勸酒」から。訳として井伏鱒二の名訳があります。「花にあらしのたともあるさ さよならだけが人生だ」また寺山修司にも「勸酒」を踏んだ詩があります。

(文責 中村彰利)